



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



雪山からの直接冷風採取に関する研究—基本システムとその応用—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道開発技術センター 公開日: 2012-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 賢知, 媚山, 政良 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/1622

第20回寒地技術シンポジウム (2004)

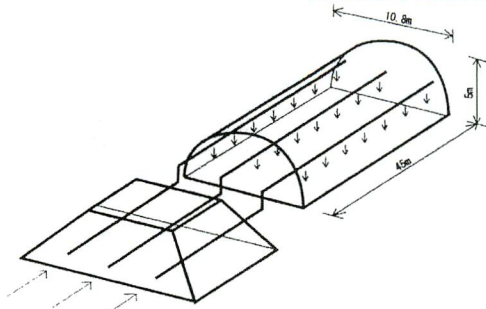


Fig. 1 育苗温室冷房概要 (来年度の実験)

Fig. 1 に育苗温室の概要を示す。雪山からのダクトを遮光シートの下に設置し、育苗棚の上から冷気を噴出するものである。

3. 今年度の試運転の概要

今年 4 月に 10m×10m×3m(H)の雪山を豊浦町に建設し、8 月に穴あけと冷気抽出の試験運転を行った。雪の保存は良好であった。Fig. 2 に実験装置の概要を示す。

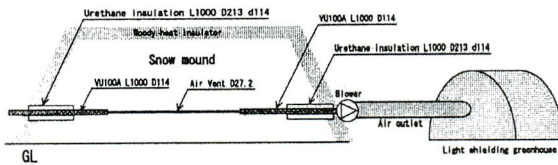


Fig. 2 試験運転概要

雪山内に空けた空気穴の径は初期 27mm 程であった。ブローアは空気を引く形で配置した。温室内気温が 15℃ になるとブローアが停止するように温調を設置した。雪と断熱材の間にはシート等を配置せず、雪を直接パーク材で覆う形とした。雪山で得られた冷風はビニールダクトを通して遮光したマルチに送り、このマルチを育苗温室に見立てて冷房を行った。湿度はおんどとり (TR72-S) をもちい、雪山への吸気・雪山から排気 (ブローアの上流)・マルチの中央部・マルチの吸気で測定を行った。

4. 試運転結果

試運転における温度について Fig. 3 に示す。実験期間は 2004/8/9~8/25 である。結果から述べると、雪の融け方が当初計画したものとは異なり、実験としては失敗に終わった。計画として雪山内の空気穴内の熱伝達を期待したのだが、結果として雪山からの出口に設置した断熱材の周囲と、出口に近い雨水による縦方向の穴内の熱伝達が大きく、雪山内の横方向の空気穴の発達が遅れてしまい、雪山出口近傍

雪が大きく融解してしまった。温度の結果としては満足した。結果を以下に示す。今回は夜冷育苗を目的としているため、日中の温室温度は高く推移しているが、夜間の温度は 17℃ 程度に抑えることができており当初の目的は達成したものと考えられる。雪山から出た冷風の温度は日による差異が大きい。実験初期に比べ 8/14 を過ぎた頃から低い温度を記録しており、最低温度は 5.0℃ であり、外気温の高い日中でも雪山排気温度の上昇は少ない結果となった。雪山吸気温度計を測定する温湿度計を吸気ダクト管内に設置したため、夜間の気温が 3℃ 程度まで低下している。

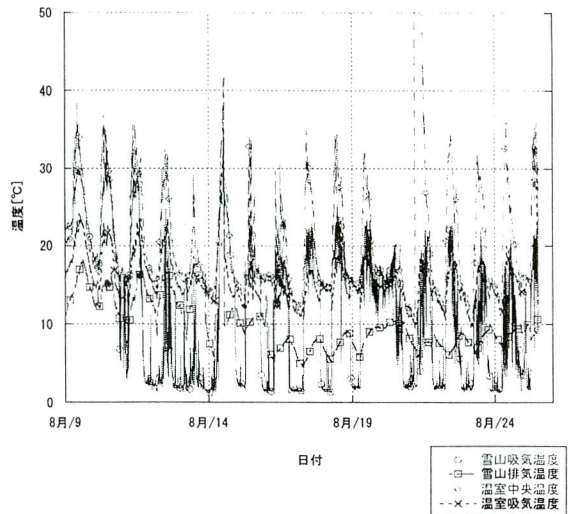


Fig. 3 試験運転結果

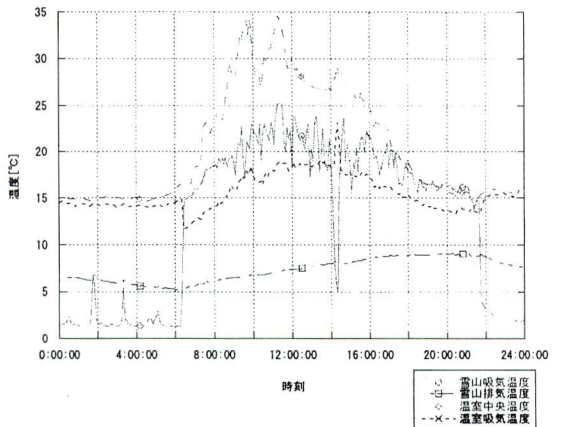


Fig. 4 2004/8/18 の温度結果

これは夜間温室内気温が低下した際にブローアが停止し、雪山内の縦方向の雨水によって出来た穴と横方向の空気穴が繋がっている部分でドラフトが起き冷気が逆流したものと思われる。

8/18一日の温度について Fig.4 に示す夜冷短日処理で冷房が必要となるのは16時から翌8時までであり、朝方のマルチ内の温度は満足しているが、夕方遮光シートに日射があたっている時刻は23℃であり、冷房能力が不足しているのがわかる。夜間ブローアはほとんど動作しておらず、夜間だけで見ると冷房能力は必要としない。

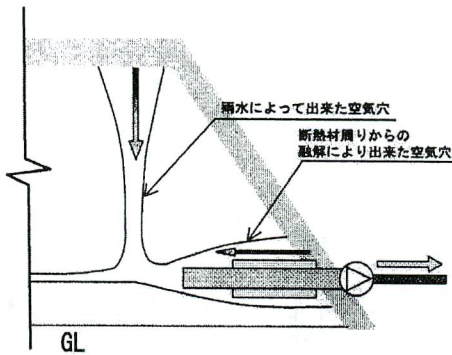


Fig. 5 断熱材周辺及び雨水によって出来た穴からの空気の流通

実験が失敗した原因を Fig.5 に示す。横穴の径が小さく圧力損失が大きかったため、ウレタン断熱材の周囲を空気が流通し、穴が広がったためと、雨水によって出来た縦方向の穴と、横方向の空気穴が通じてしまい、結果的に短絡したものである。

5. 雪山からの冷風採取法

これらの試験結果をふまえ、雪山を春に造成し、夏実際に冷房を必要とする期間の前に穴をあけ、この穴から冷風を得る方法として二種類の方法を考えている。Fig.6・Fig.7 に示す。

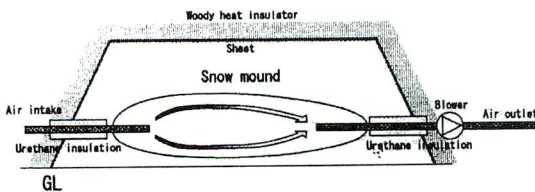


Fig. 6 通過式雪山 - 空気熱交換方式

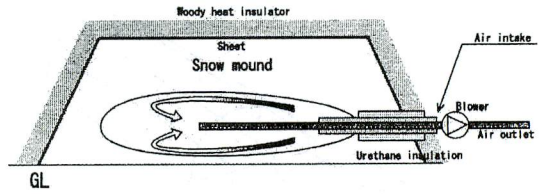


Fig. 7 往復式雪山 - 空気熱交換方式

Fig. 6 は雪山中を一方方向に空気が通過し、雪と空気が熱交換するタイプを示している。Fig ではブローアを引きで示しているが、押しの場合も、二台使用する場合も考えられる。雪と断熱材に使用するパーク材の間にはシートを挟んでいる。これは雨水がパーク材を通過した後、雪に小さな穴を無数に空けることが確認されており、この穴から空気を吸い込めることを防ぐためにシートで雪を覆う必要がある。吸気・排気はそれぞれ VP 管を用いる。この VP 管の周囲にはウレタン断熱材を設置しているが、この断熱材により、雪山内部に空間を設けパーク材の崩落を防ぐものである。

Fig. 7 は往復式の雪山 - 空気熱交換方式について示している。Fig ではブローアを引きで示している。この方式だと押し状態で設置するのは、多少工作が必要となる。吸気・排気は二重管で行う。一方方向式と比較し構造的に簡素にすることが可能である。

二つの方法は共に、造成した雪山に夏季横穴をあける必要がある。この雪山に横穴を開ける方法として、VP 管に水を流しつつ人間が手で押しだけで 10m 程度の穴を開ける事が可能であることを確認している。今回のテストでは 3/4 インチの VP 管を用いて 10m の長さを 15 分程度で開ける事が可能であった。

6. 結言

今回の試験運転は雪の融け方が予期せぬ方向から進んだため、実験としては失敗に終わった。この試験運転において判明したことを以下に示す。

1. 雨水による空気穴を防ぐために、雪と断熱材の間にはビニールシート等で雨よけをする必要がある。
2. 既設の雪山に 30mm の穴を 10m 程度横に開けることは容易であり、空気の圧力損失を低減するためにも、この空気穴の大きさは大きいほうが望ましい。

参考文献

1) 三原 義明, 温室設計の基礎と実際, (1980), 朝倉書店 95
 2) 日本建築学会, 建築設計資料集成, (1978), 丸善